

落の發達と該地に於ける特殊の地的條件との關係を明かにし如何に人類が其の地的環境に影響せられ、之れに順應し若しくは之れを支配したるかの特別なる場合を研究しなければならぬ事

關東大震災と神戸港

となつた。今日は漸く基本的準備的作業を終れるに過ぎないのであるが作業中氣付ける考へ的一端を録し以て後日の研究に資せんとするのである。(一九二五・六二)

西 龜 正 夫

大正十二年九月の關東大震災が、神戸港に如何なる影響を及ぼしたかと云ふことは、興味ある一題目たるを失はぬ。而してそれは、簡單に云へば横濱の衰頹に代る神戸の興隆であるが、詳細に觀察すれば、その間に又種々の問題がある様である。

本篇には主として大正十一年以後三ヶ年の統計を引用する。震災は大正十二年の九月一日であつたから、十二年の統計には震災前の状態と震災後の状態とが、二と一の割合で混入相殺し

て表はれて居る筈である。

元來横濱、神戸の兩港が我が國貿易界の二大關として東西に雄視して居ると云ふことは、僅々二三十年來のことで、明治の前半に於ては横濱の盛況に比して、神戸の微々たる状態は到底比較にならなかつたのである。即ち明治元年に於ける貿易額を見ると、横濱は全國の八割を占め、神戸は僅かに四分を占むるに過ぎなかつた。明治三年以後神戸の進境稍著しく、六年には輸出入總額に對して、横濱が七割一分、神戸

一割七分となつた。そして明治十七年頃からは横濱の貿易は漸次減少したに反して、神戸は依然として増加したので、二十年には横濱六割三分、神戸二割八分となり、三十年に横濱四割六分、神戸四割四分、三十一年に横濱の四割三分に對して神戸四割五分となつて始めて其位置が顛倒した。併しこれは一時的現象であつて、三十三年には兩港同率となり、三十四年以後は神戸は横濱の下位に落ち、大正四年と六年とは神戸が一位に上つたわけで、その後は常に横濱が上位にあつたのである。然るにそれが震災によつて、三度形勢は逆轉するに至つた。

神 戸	全 國		大正十一年	同 十二年	同 十三年
	輸出	輸入			
輸出	一、六七、四七	一、四七、七四九	一、八七、三三	一、八七、三三	一、八七、三三
輸入	一、八〇、三三	一、九七、〇三	一、九七、〇三	一、九七、〇三	一、九七、〇三
計	三、四七、八〇	三、四四、〇七	三、八四、三六	三、八四、三六	三、八四、三六

全國に對する歩合	全國に對する歩合		全國に對する歩合
	輸出	輸入	
〇、四七	〇、四七	〇、四七	
〇、三三	〇、三三	〇、三三	
〇、三三	〇、三三	〇、三三	

この表によつて見ると、横濱はその全國に對する割合が、十一年には四割三分九厘で、十二年には急減して三割一分となり、神戸の三割九分八厘よりも遙かに下つた。そして大正十三年には横濱は復興の緒についたにも拘はらず、尙神戸よりも一割以上少いといふ状況である。蓋し横濱が状態に復して、神戸を凌駕するのは、尙數年内のことではあるまいと思はれる。

次に神戸港の貿易に就て、今一應詳しく觀察して見る。元來この港は輸入港として名高い港で、輸入は常に輸出よりも著しく多い。それが震災の影響として、輸入に於ける増加はあまり

著しくないので、特に輸出のみが急激な増進をなして居ることは、前の表でも一通り明瞭であるが、更に次の一表を見ればよくわかる。

年次	總額に對する輸入		總額に對する輸出		輸入を百とする輸出額の指數
	歩合	總額	歩合	總額	
十一年	〇、七五	〇、七五	〇、二五	〇、二六	三三
十二年	〇、七四	〇、七四	〇、二六	〇、三三	三五
十三年	〇、六七	〇、六七	〇、三三	〇、三三	五〇

即ち輸入額に於ては大きな變化が無いのに、輸出額の増加が著しい爲めに、嘗ては輸入と輸出が三と一の割合であつたものが、一躍して二と一の割合となり、輸入港たる神戸の特色に一大變化を來たしたのである。
そこで更に如何なる種類の輸出入品が、最も大なる變化を來したかを見よう。

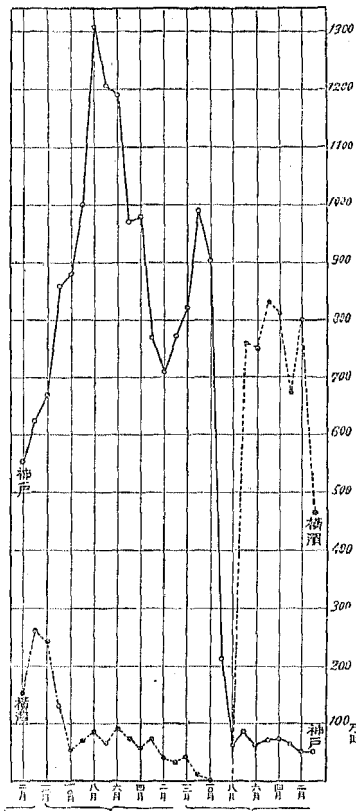
類別	十一年			十二年			十三年			十年を百とする指數
	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓		
食料粗製品	一四、八四三	一七、三三五	一九、六六六	一七、三三五	一九、六六六	二〇、九七九	一七、三三五	一九、六六六	三三	
同製造品	一一、九二〇	一〇、七三二	一六、七九二	一〇、七三二	一六、七九二	一六、七九二	一〇、七三二	一六、七九二	三三	
原料品	二五、八五五	三三、一四五	四五、一六七	三三、一四五	四五、一六七	四五、一六七	三三、一四五	四五、一六七	一〇七	

關東大震災と神戸港

入	輸					出				
	計	雜品	全製品	原料用製品	原料品	計	雜品	全製品	原料用製品	原料品
八六、五三二	三、〇〇〇	一五、三六九	一九、八八二	四八、三三七	一、九七九	二九、八二六	六、七九七	二五、〇二八	五九、五五五	一、三二一
二〇七、七〇七	三、〇〇五	一七、八四一	二二、六六六	五三、一〇八	二、八六三	五七、一〇八	四、〇六六	三〇、一六一	六六、三三二	一、四九二
一七〇、七三六	四、一五八	一七、一七二	二二、八七七	四七、七七〇	二、四六〇	五八、〇三九	八、一六三	三三、〇五五	六六、八四三	一、二二六
一〇七、一七五	一、五五	一五、三六九	一九、八八二	四八、三三七	一、九七九	二九、八二六	六、七九七	二五、〇二八	五九、五五五	一、三二一
一〇七、一七五	一、五五	一五、三六九	一九、八八二	四八、三三七	一、九七九	二九、八二六	六、七九七	二五、〇二八	五九、五五五	一、三二一

これによつて見ると、輸入の方は概して各類共平均して増加して居るのに、輸出の方は頗る不揃で、就中原料用製品の増加は最も著しくて二五〇を示し、全製品及び原料品も亦他の類に比べると割合に増加が甚しい。そこで更に輸出の各品別に調べて見るに、十一年分を百としての十三年の指數が二百以上を示して居るものは、原料品中では屑綿屑綿糸、絹屑物、原料用製品中では薄荷腦・生糸・鐵條竿板・麻真田、全製品では羽二重・縮緬・富士絹・ボンジ・縺子・生金巾及生シ

ーチング・天竺布・棉製浴巾・手巾・印刷料紙・靴具等で、殊に絹屑物は千六百四、羽二重は三千四百六十二、富士絹ボンジーは千二百二十七、手巾は千二百七十といふ指數を示し、生糸は十一年に絶無であつたから、指數無限大となるわけ



勢 趨 出 輸 物 織 絹 港 兩

蓋し震災前に於て、生糸の輸出は横濱の獨占であり、絹織物も亦殆んど横濱港の獨占で、大正十一年に於て全國の約九割を占め、神戸は僅かに八分餘を占めるに過ぎなかつた。これには地理的必然の理由は比較的薄弱で、寧ろより多く歴史的の影響であつた。

先づ生糸貿易に就て見ると、その輸出は横濱開港と同時に開始され、横濱神戸の兩港がその輸出港で、明治二十九年には兩港ともに生糸検査所が設立されたが當時我が國に於ける生糸の生産は、關東及中部地方が主産地で、關西地方は微々たるものであつたら、従つて横濱の輸出は益々盛になり、神戸は遂に落伍して、その検査所も明治三十三年限り廢止されるに至つた。

である。又價格の點から云へば、生糸の八千八百萬圓、羽二重の五千貳百萬圓、富士絹ボンジーの參千八百萬圓等が全輸出品中の最右翼を占めて居るのであるから、要するに神戸港の輸出の増加は、生糸と絹織物の増加によると斷定してよいわけになるのである。

その後日露戦争があり、世界大戰が起るに至つて、本邦の生糸業は躍進的發展を遂げ、世界

第一の供給國たるに至つたが、その輸出は依然として横濱の獨占であつた。殊に關西地方の生糸業が大に發達して、關東地方を凌駕するに至つても、尙横濱がその輸出を獨占して居たことは、地理的事情を無視した不自然現象であつたと云つてもよい。

地 域		大正元年	大正十一年
關 東	關 西	三三、八%	二七、一%
中 間	西	三四、二%	三四、二%
比 率	西	三三、〇%	三八、七%

この歴史的因習を打破したものは實に關東大地震であつた。横濱全滅と同時に神戸が活躍を始めた、賣込問屋が出来る、輸出商が出来る。十三年一月には市立の検査所も不完全ながら事業を開始する。倉庫が出来る、同業組合が設立される。陣容が次第に整つて來たので、一時横濱の躍起運動から、一港主義だの二港主義だのと可成り面倒な問題も起つたけれども、兎も角も現今全輸出高の五分の一内外を神戸から輸出

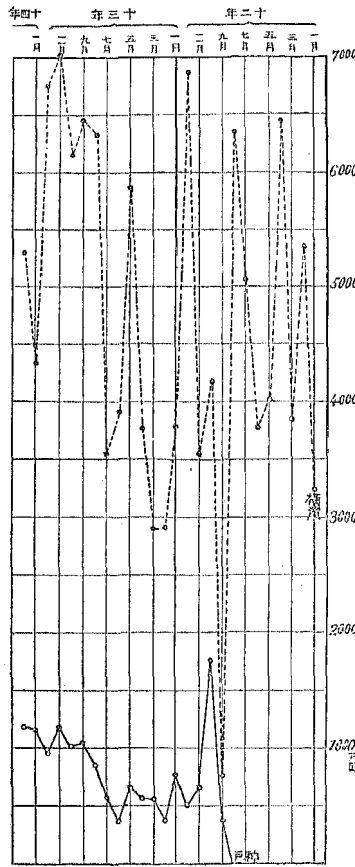
しつゝあつて、年と共に發展の勢を示して居る兩港輸出高消長の模様は別表の通りである。これによると震災直後四ヶ月の神戸の輸出は、同期間の横濱の二割一分を占め、大正十三年中の輸出高は、神戸は横濱の一割四分、大正十四年の二ヶ月間では二割四分となつて居る。そして神戸に入荷する生糸の産地は、關西地方を主とする。勿論で、就中徳島・愛媛が最も多く、鹿兒島・宮崎・廣島・三重・和歌山の各縣が之に次ぎ、長野も亦相當の數に上つて居る。そこで今後の趨勢を豫想するに、少くとも關西に産する生糸の全量と同額までは、神戸から輸出されるのが自然では無いであらうか。若し果して然らば、神戸の生糸輸出は現在の二倍乃至三倍まで増加する可能性があるわけである。

併し乍ら現在の處で、生糸輸出港としての横濱の勢力は、容易に侮り難いものがあつて、歴史的の惰力の中々顛覆しそふには見えぬ。神戸が之に對抗し得るのは、まだ／＼近い將來には期待が出来ぬ。然るに絹織物に至つては、其變

化の狀況が最も顯著で、震災を一エボツクとして横濱と神戸とが全く其の位置を交換したことが、別表によつて明瞭にわかるのである。

元來神戸港に於ける絹織物の輸出は、震災前は實に微々たるもので、大正十一年の統計によ

なつた。殊に震災前後の三ヶ月間、横濱の輸出が殆んど絶無となつた時、神戸が一躍して以前の横濱よりも以上の輸出高を示したことは、實に急激驚くべきの變化であつた。
蓋し我が國に於ける輸出絹織物の産地は、關東・奥羽の方面に比較



勢趨出輸糸生港兩

的多く、關西には殆んど云ふに足るものが無いから、横濱がその主なる輸出港となるのは當前の様であるが、福井・石川・岐阜等の羽二重や富士絹は、神戸から輸出する方が地理的

ると、横濱の九千六百七拾萬圓に對して神戸は八百七拾萬圓で、全國に對する割合は横濱が八割九分六厘、神戸が八分一厘、神戸は横濱の九分餘に過ぎなかつたが、大正十二年には位置全く逆轉

自然でなくてはならぬ。それが從來不便な横濱を経て居たのは、傳統の結果商業機關が神戸方面に不備であつた爲めである。

横濱の六割六分に上り、翌年には位置全く逆轉して横濱は神戸の七分を占むるに過ぎない様

震災はこの不自然を全く自然に歸らしめた。否横濱の位置を神戸が奪つて反對に不自然な現象を生じつゝある。即ち神戸から輸出する絹織

物の産地を見ると、

羽二重 福井五割、石川三割、川俣二割

富士絹 石川四割、福井二割、岐阜濱松二割、桐生足利二割

絹紬 福井六割、岐阜三割、

と云ふ風に、横濱から輸出するを便とする地方
までが、神戸から輸出して居る奇現象を見るの
である。一面又取扱業者から云つても、歐米人
の絹物輸出商は神戸九割、横濱に一割の割合印
度人は六割まで神戸にあつて輸出に従事して居
る。邦人の輸出商も亦震後、横濱から神戸に移
轉したものが非常に多いのである。この勢から
考へると、横濱がその勢力を挽回して、神戸と
對抗し得るの時期は、一寸容易には來ないこと
であらう。

そこで最後に考へて見たいことは、震災によ
つて生糸と絹織物の輸出港に大變化を來したが
生糸は依然として横濱が優勢であるのに、絹織
物は神戸の方が非常に優勢になつたのは何故で
あらうか。又生糸は多少不自然に横濱に集中し
絹織物は反對に神戸に向つて不自然に集中した

のは何故だらうか。これを純然たる地理的現象
とは見ることが出來ぬ。蓋し生糸の輸出は横濱
の生命であるから、これが回復には死力を盡し
たが、絹織物に至つては、價格の點から云つて
も左程重要でないから、横濱の努力が神戸に及
ばなかつた爲めなのだらう。人間の意志は自由
であるから、環境に對する應答が必然的で無い
のは云ふ迄もない。これは地理的現象を研究す
るものゝ忘るべからざる事柄である。

本筋を草するにあたり、貴重なデータを提供せられた神戸商
業會議所の好意を多謝す。